

とある呪術と墮落世界

文永柄長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪物を愛した神の端末が、元いた世界に戻るまでの間、異世界で呪術師のサポート役として頑張るお話。

目次

序章

とある端末の不幸某日	—	Terminal	1
とある端末の異界転移	—	World	6
幕間の悪夢	—		11
墮落少女と呪われた世界	—	Fall	15
in Curse	—		15

序章

とある端末の不幸某日 — Terminal of B

ad Day —

散々な日だった。

それはもう、どつかの不幸な普通の高校生を差し置いて「不幸だー!!」と叫んでしまいたいくらいには、不幸な一日だった。

その日はあつくん（アクセラレータ一方通行）と私以外の同居人が早朝から家を出払っていた。

家主の黄泉川さんは警備員アンチスキルの仕事があるとかで起きた頃にはもう既に出勤しており、芳川は打ち止めの調整のために二人で病院へ。番外個体はミサカワリストと言えればいつの間にかやらふらつと姿を消してどこかへ行つてしまい、実質的に家にはあつくんと二人きり。

しかも普段なら断られるであろう私からのデートの誘いに、あのガードが固いあつくんが乗ってくれたという…っ!!

その時の状況だけで言えば、私にとってはこれ以上ないほどの最高のハッピーデーだった。

嬉しすぎてそれ故に動揺しすぎて、あっくんにはドン引きされたけれど。

それすら気にならなくなるくらいには、私はとても幸せだった。

だが。

その後が地獄だった。

幸せな気分から一転、絶望へと一気に叩き落とすかのような、正に地獄と言わざるを得ないほどの最悪な一日だった。

まず、序盤からコケた。

マンションから出た瞬間、頭に白っぽい粘着質な液体が私の頭に降ってきた。烏の糞である。この一回で済めば「災難だったねー」で済むのだが、これが計5回。

しかし私の不幸はこれだけで終わらなかった。

歩いている時に道端に落ちていたバナナを踏んで転ぶのが計6回。

動作不良を起こした警備ロボに追いかけられるのが計3回。

三毛猫を愛でようと持ち上げた際に顔を引つかかれ、そのまま飼い主と思われる銀髪シスターに顔を踏まれるのが1回。

やっこの思いで映画館に辿り着き、目当ての映画を見ようとしたらチケットが全て売り切れていたのが計2回。

カフェで昼食を摂っている最中に強盗の襲撃に遭うのが1回。

身も心もボロボロだった。

あつくんにすら心配をかけてしまった。

その心配すら喜べないほど、私の心に余裕はなく。

「あつくんと「デート」ということで気分が高揚していたのも相まって、その反動で夕方になる頃には私は惨めつたらしく子供のようになり泣いていた。

?

「ひぐ、え……うええええんっ！なんっ、う、なんっで、ぐずっ、こおなるんだよおっ！」

「ハア……そんな気になることねエだろ。また次行けばいいだけの話だろオが」

「だって……だって、わたし……ひっ……っ、あつくんと……デートがっ、できるって……おもったらっ……うれしくて……でも……チケツトはうりきれてるしっ、ねこにはかおひっかかれるしっ、ふんはおちるしっ、バナナでころぶし……う、うう……ううううう……っもお、やだよお……！」

拭いても拭いても涙が止まらない。

叫びすぎて、でも呼吸が上手く出来なくて、苦しい。

世界がぼやけて、足元がふらつく。

どうして私ばかりこんな目に遭うんだろう。

私はただ、大好きな人と楽しい日々を過ごしたかっただけなのに。

私は、ただ——…。

「…つたく、オマエもオマエで仕方のねエヤツだな」

気が付くと、あつくんが私に手を差し伸べていた。

彼らしからぬ優しい表情で、ふっと柔らかに笑いながら。

「あ…」

「オマエにそんな顔されるとこつちの調子が狂うんだよ。手工繫いでやるから、早く帰るぞ」

ぼやけていた世界が、一気に煌めきを取り戻したような、そんな感覚がした。

私の奥底から何かがこみ上げてくる。

それをぐつと呑み込んで、私は「…うん、っ」と頷き、あつくんの手を掴むために一歩、前へと踏み出して、

体が一瞬、宙に浮くような感覚がした。

「——えへっ…?」

見下げるとそこには一寸先も見えないような深淵が。

見上げるとそこには呆気にとられた顔をしたあつくんが。

そして辺りには、

「ふ——不幸だアアあああああああああ!!!」

不幸を嘆く絶叫がただ、響き渡るだけだった。

とある端末の異界転移 —World_Metastasis—

S i s —

「……っは」

目が覚めると蛍光灯の真白い光が私を照らしていた。

鼻につくようなアルコールと、薬品の匂いがする。

……ここは病院なのだろうか。

起き上がってみると、すぐそこに薬品の入った棚と事務机。

病院と言うよりはどちらかと言うところは学校の保健室のような場所だ。

顔を触ってみると頬にガーゼの感触が、そして鼻には絆創膏が貼られていた。

どうやら誰かが治療をしてくれたらしい。

しかし驚いたことに足の方は何ともなかった。相当な深さのマンホールから落ちたというのに骨折一つなく普通に（脳の後遺症のせいできこちないが）動く。

……しかし、あつくんが助けてくれたという可能性を鑑みても、何故私が保健室のような場所にいるのかが分からない。

あの場所からなら黄泉川邸の方が近いし、わざわざ学校に連れ込む理由も不明だ。

あつくんがそんな訳の分からない行動をとるわけが無い。

だとしたら、私は一体誰に助けられたのだろうか…？

「起きたか」

「っ誰…?!」

扉を開けて入ってきたのは、イカつい顔の男性。

明らかに教師というような風貌をしておらず、どちらかと言うとヤクザか極道のような見た目をしている。

「貴方は、一体…」

「私はここで教師をしている夜蛾という者だ」

「は、はあ」マジで教師だった。

「君の名前を教えてくださいるか」

「…：落界レイト、です」

「そうか、では落界。つかぬ事を聞くが君は何者だ？どこからここにやってきた」

「私は…：マンホールから落ちて、それで」

「マンホール？」

ピクリ、と。夜蛾さんの眉が動いた。

「君は空中から突然現れたように見えたが…：マンホールから落ちた、とはどういうこと

だ」

「え……う？」

空中から。ともすれば私を助けたのは空間移動系の能力者なんだろうか。だがあの時は私とあつくん以外の歩行者は居なかった。そもそも私に空間移動系の能力者に知り合いは……いるには居るが、あのオセロ少女は手に触れた物しか運べないはずである。

「あの、私の他に落ちてきた人は居ますか？」

「いや。落ちてきたのは君一人だけだが」

「そうですか……なら空間移動系能力者が私を助けたという線は薄いかな……」

「空間移動系……？能力者……？それらは一体なんだ」

「え？」

「うん？」

空間移動テレポートを知らない？……どういうことだ。学園都市の教師なら空間移動くらいは知っているはず……なのに。

「本当に知らないんですか……？空間移動……。てかここ、どこの学校なんですか？学園都市所属の学校じゃないんですか？」

「空間移動なんて言うものは初めて聞いたし、ここは学園都市なんて言うところでもない。ここは『都立呪術高等専門学校』という宗教系の学校だ」

「……………都立？」

基本的に学園都市に設立されている学校には都道府県立の名称は付かないはず。

それに『呪術専門学校』という名前も怪しさ満点だ。そんなオカルトチックな学校を、『神秘やオカルトはナンセンス』だと言い切る学園都市が設立するとは到底思えない。

マンホールから落ちただけだって言うのに…。まさか学園都市外にまで来てしまうとは。

とんだ災難だ。

「君、まだ動いては」

「いえ。早く学園都市に帰らないと同居人が」

「君はさつきから何を言ってるんだ…？そもそも学園都市なんてものは存在しないぞ」

「心配する——は？」

学園都市が、存在しない。

存在、しない…？

「そんな、嘘ですよね」

自然と声が震えた。

「あの学園都市ですよ？総人口230万人。内8割が学生の、学生の街、科学都市……日
本人なら知らないはずない、のに」

「本当だよ」

呼吸が止まる。

「本当に、『学園都市』なんてものは存在しないんだ、落界」

世界が静止した。

頭が殴られたように痛い。口から嗚咽しか出ない。

耳鳴りがして、そして。

そのまま、目の前が真っ暗になった。

幕間の悪夢

水彩画のような世界。

淡い水色の空と、淡い灰色のアスファルトの世界。

その中心に私は座っていて。

瞬くと、一瞬にして人で溢れかえった。

同じような顔ばかりだった。見た事のあるような顔ばかりだった。

大好きなあつくんの顔ばかりだった。

「見たことがあるような顔」と言っただけだけど明確に分かるのは口元だけで。

服装や体型があつくんのそれなので多分そうだと思う。

その隣には今まで出会った人達がいいた。

こちらも顔は臍気で口元しか分からないが、見た事のある服装ばかりだった。

顔が臍気なので表情もよく見えなかったけれど、皆樂しげに会話して幸せそうな雰囲気

気に包まれていた。

あの美琴ちゃんと思われる人物でさえ、あつくんと笑いあっていた。

——私の入り込む隙なんてない。

なぜか、そう思った。思ってしまった。

周りは相も変わらず、へたり込む私を気にもせず、私が声をかけても気にもとめずに歩いていく。

次第に。私だけを置いて、楽しそうに笑う顔が見てられなくなって、堪らず走り出した。

走っても走っても、あつくんの隣を並んで歩く私の姿は居なくて、それがまた辛くて、ただ人波に逆らってひたすらに走り続けた。

……気が付くと、そこには見知った日常の風景が広がっていた。

いつもの黄泉川家の日常。

ソファーにはあつくくんが寝転んで、あつくんのお腹の上を打ち止めが楽しそうに乗り込んで、鬱陶しそうなあつくくんを見て、ゲラゲラと愉快そうに笑う番外個体が居て、その光景を黄泉川さんと芳川が微笑ましそうに見ている。

——けれど、そこに私の姿は無かった。

見えない壁が邪魔をして、私はそこへ行けなかった。

私はただの観客のように、その日常を見ていることしか出来なかった。

「う……あ、ああ……」

虚しさ、切なさが私の心を埋めつくし、私は耐えきれずに膝から崩れ落ちる。

「黄泉川さん……」

家主の名を呼ぶと、彼女は声を上げて笑った。

「芳川……」

居候の研究者の名を呼ぶと、彼女は可笑しそうに苦笑を零した。

「番外個体……」

白いアオザイを着た少女の名を呼ぶと、彼女は服が乱れるのもお構い無しに笑い転じた。

「打ち止め……」

水玉模様のワンピースを着た少女の名を呼ぶと、彼女は心から幸せそうに、あの人に笑いかけた。

「一方、通行あ……っ」

壁に縋り付きながら何よりも愛しい人の名を呼ぶと、あの人は打ち止めの頭に手を置いて、一瞬こちらを見たような気がして。

「……………」

気付いて、くれた……？

「あ、一方通行っ！ みんなー！」

その事実が私を絶望の淵から掬い上げた。

そして、無我夢中になりながらもたつた一つの光日幣へと帰るために、己の手をめいっばい伸ばして、叫んだ。

——私はこちらにいるよ

墮落少女と呪われた世界 — Fall in Curs

e —

「……………あ、れ」

気が付くとそこは黄泉川家の天井…ではなく先程見た蛍光灯の付いた天井だった。

分かっていたつもりだったが、どうやら現実というやつは私の想像以上に非情なものらしい。

「気分はどうだ」

起きてすぐ横を見ると、そこには夜蛾さんが座っていた。

答えようとして声を出してみるものの、長い間水を飲んでいなかったせいかわ喉が渇いて上手く発声できない。

そんな私を見た夜蛾さんは黙って水の入ったペットボトルを差し出してくれた。軽く会釈して有難くそれを頂戴し、浴びるように水を飲む。

飲み口から口を離す時にはもうペットボトルの中身はほとんど空になっていた。

「そんなに喉が渴いていたのか」夜蛾さんが少し驚いたふうに聞いてくる。

私は少し気恥ずかしくなって、誤魔化すように頬を掻きながら「ええまあ…その、お

「昼からなんにも飲んでなくって」と強盜被害に遭ったことは伏せながら正直に話した。「そうか」

夜蛾さんはそれだけ言うと手元に視線を落とす。

数分気まずい空気が漂ったものの、静かに告げられた一言がその雰囲気を通り切った。

「…君のことを調べさせてもらったが、」

「驚いたことに、戸籍や住民票などをあらかた調べてみてもそれらはおろか、落界レイトが生きていた痕跡さえも」全く存在していなかった」

「——」
やっばりな、と。

半ば諦め気味にため息を漏らした。

先の夜蛾さんの「学園都市は存在しない」と言う発言。

私がいいた世界の日本人であれば絶対に言うはずのない言葉。

そして、保健室の壁に掛けられていたカレンダーには『西暦2006年』と書かれている。

この際ナチュラルにタイムスリップしているのは置いておくが、この頃の学園都市はすでに世界有数の科学・教育機関として名を馳せており、日本であればどんな辺境の地

に住もうとも学園都市の評判を聞くほどには有名で。

このタイミングで「学園都市が存在しない」という言葉が出るといふことはある一つの可能性が出てきたといふことだ。

その可能性というのが：俗に言う『異世界転移』である。

……正直考えたくはなかったし、信じたくもなかったけれど。

「驚かないのか」

「驚いてないわけではないです。ただ、ちょっと、その：疲れてしまつて」

不幸やらさっきの悪夢のような夢を見たお陰で、既に精神力が一気に削られ力無く笑うことしか出来なかった。

いや、そもそも。

私は笑っているのか、ちゃんと笑えているのか。

私が笑顔を作っているつもりでも、鏡を見れば実は無表情のままなのではないだろうか。

……もう、疲れた。

不幸如きに私の幸せな一時を台無しにされ、あまつさえマンホールから落下して（暫定）異世界へと転移し、そして動揺のあまり気絶して、あの悪夢のような夢を見て……。

ここに来てから併せて12時間ほど眠っていたらしいが：全くもって気分が晴れな

い。

むしろ逆に疲労が溜まっているような気がする。

ああ帰りた。

あつくんに会いたい。

どうして私がこんな目にあわなくちやいけないのだろう。

どうして、どうして——。

そんな淀みが、私の奥でグルグル廻り、そして。

ぐしゃり、と。

気が付くと、持っていたペットボトルを握り潰していたようだった。

脳を怪我しているというのに、まだこんな力を残していたのかと私は自嘲気味に笑う。

「…本当に大丈夫か」

「大丈夫ですよ」

殆どノータイムで虚勢を張った。

別に『これ以上他人に心配を掛けさせるわけにはいかないから』なんて、そんな綺麗な理由で『大丈夫』を取り繕ったわけじゃない。

何もかもが面倒で、あらゆるものがどうでもよかった。

ただそれだけの理由で、私は投げやりな形で虚言を吐いた。命の恩人に対してする態度じゃないってことは分かつてる。

どこに打ち捨てられようと、文句すら言えないようなことを私はしてしまった。なのにどうして。

どうして貴方は、そんな真剣な眼差しで私を見据えてくれるのだろう。

「君の話聞かせてくれないか」

「…話」

かけられたのは、予想外の言葉だった。

てつきり追い出されるかと思っていたのだが：『話を聞かせてくれ』か。

「私の話なんて聞いてもただの子供の妄言にしか聞こえないと思いますよ。今の私は、戸籍も存在を証明するものも何も無い。無い無い尽くしの身元不明な怪しい人物です」

突き放すように私は言う。けれど彼はそれでも引き下がった。

「確かに君は怪しい人物だ。だが話を聞かない限りは呪詛師かそうじゃないかの判断を下すことも出来ない。例えば妄言じみた話だったとしても、一時期ではあるが俺は君の話信じると約束しよう」

「……………」

『呪詛師』が何なのかは分からなかったが、要は私の話を聞いてから敵か味方か見極めるってことなんだろうか。

双方黙ってしばらくの間互いの目を見ていたが、気力も忍耐も反抗するだけの余力もなかった私は早々に諦め、彼の言う『呪詛師』……というか『呪術』？について教えてもらう変わりに（この取引をした際、夜蛾さんは何か呟いていたが）私は私のいた世界について知っていることを話した。

と言っても、さすがに魔術サイドについてまで話す必要は無いと判断したため科学サイドについてのみだが。

？

……うん。

科学サイドの総本山たる学園都市と能力開発、そして私の持つ能力について説明した
はいいものの。

自分で言ってる現実離れた話だなと改めて思った。

都市に住む総人口230万人の約8割が学生という時点で既に現実離れが過ぎるが、更に学生全員が脳の改造を施され、能力の開発を行っているなんて、最早夢物語などという次元を超えているとしか言いようがなく、正体と目的を知っている私でさえ、客観的に見たことよって改めて学園都市という街の異常性を再認識した気がした。

それに、私が話したのは学園都市の表面上の話だけ。

裏側の話はしなかった。暗部の事なんて、それこそ一般人相手に気軽に言えるようなものじゃない。

私でさえ、暗部で行われた実験内容を思い出すだけでも胸糞悪くなるというのに。

しかし、夜蛾さんは聞き始めから聞き終わりまで、決して「ありえない」だとか「信じられない」などというわけでもなく、ただ納得したように、うんうん頷いて「なるほど、大まかな事情は理解した」と言うだけだった。

というか。

あの世界に住む学園都市の名前だけを知っている外部の人間に説明しても理解してもらえないかすら怪しい話を、学園都市の「が」の字も知らないような異世界の人間が何故こうもすんなり理解出来るのかが謎だ。

と思ったがしかし、聞くところによると、呪術と能力は少し似通った部分があったため大方の理解が出来たとのこと。

夜蛾さんの説明を受けるまで、私は呪術師…いや『呪術』という物をつきり私のいた世界で言うところの「魔術」と同じような物なんだと認識していた。

けれど、その認識は間違いだった。

より正確に言えば『半分正解の半分不正解』と言うべきか。

「どうやら呪術というのは、例えるとすれば能力と魔術を足して2で割ったようなものらしい。」

「能力と似ている部分を挙げるなら、やはり一人に一つ。特有の能力……というより術式？が備わっているという点か。」

「ただ、呪術の場合は先天的、対して能力の場合は脳の開発によつて授かった後天的なものであり、この時点では能力と言うより『原石』に近いな、と私は思った。」

「魔術と似通つているところと言えば、やはり目に見えない『力』を使つているという部分だろう。」

「魔術を行使するには魔力が必要であり、また呪術を使う場合には『呪力』という人間の負の感情を原料としたエネルギーが欠かせないようだった。」

「なるほど……確かに、能力のことを全く知らないような夜蛾さんがすぐに理解出来たのも納得です。所々違いますけど似ている部分も要素要素でありますね。それで、呪術を行使する呪術師というのはどんな存在なんですか？」

「呪術師、というのは基本的に『呪霊』を祓い、非術師を守る者達のことを言う」
呪霊。

負の感情から生まれた異形の存在。

人に害をなし、この世界で起こっている怪死事件や行方不明事件の殆どが呪霊による

被害とされているらしい。

呪いは呪いでしか祓うことが出来ず、だからこそ呪霊から人々を守るために呪術師と
いうのが存在している。

反対に、呪詛師は人間に危害を加える呪術師のことを言うとのこと。

呪いは呪いでしか祓えない——なんて。

普通呪いに呪いをぶつけたらさらに強力な呪いが出来上がるだけなのでは？とも
思ったが、ここではそれが常識らしいので、私は余計なことを言うまいと口を噤んだ。

「それで、私が今いる学校がその呪術師を養成するための学校であると」

「そうだ」

都立呪術専門学校は、東京郊外にある学校で表向きは宗教系の学校ということになっ
ており、京都の方にも姉妹校があるらしい。

本来であれば「天元様」という呪術師が張る結果によって守られているようで、未登
録の呪力が発生・侵入した場合はアラートが鳴る仕組みになっているとのこと。

非術師でも多少の呪力を持つているため鳴るはずなのだが、私の場合はアラートが
全く鳴らなかつたため、悩んだ末に仕方なく介抱したと、夜蛾さんのため息をつきなが
らそう言った。

「なんか、その…すみません」

「いや。とりあえずは君が呪詛師でないとわかったただけでも大きな収穫だろう」

呪術についてのざっくりとした説明が終わり、粗方の情報交換は出来た。

後は：どうやって元いた世界に帰るまで生きていくかだろう。

マネーカードは持っているものの、この世界ではただの紙切れ同然。

戸籍もない上に私の姿はどこをどう見ても“ただの非力な子供”だ。

さらに言えば脳の半分は傷を負い、結果頭に電極を刺す羽目になり、杖に頼らざるを得ない生活を余儀なくされている私に近づこうと思う、ましてや雇ってくれる人間なんて世界中どこを探しても見つからないだろう。

ああ：死ぬ前にあつくんと式を挙げたかったな。

さらばあつくん。君を幸せにする役は、他の誰かに譲ることにするよ。

「なんで半泣きになっているんだ君は」

「このまま野垂れ死にする運命なんだなと思うと悲しくなりました」

「ああ、そのことについてなんだが」

「いえ、分かっています。もうこれ以上お世話になるわけにも行きませんからね。今まで

お世話になりました。というところで私は早めにここを出て——」

「早まるな。そして話は最後まで聞け」

夜蛾さんはそう言うのと、ベッドから降りようとした私の首根っこを掴んで強引に座ら

せた。

まだ何か話があるのだろうか。

「君の身柄についてだが、俺の元で保護しようと思う」

その言葉を聞いた時、私は思わず夜蛾さんの顔を二度見した。

正気か、この人。

「そして、高専生としてこの学校に入学させたいと思っている」

正気じゃなかったこの人。

「本気ですか。アラムってやつに引っかからなかったことは、私にはおおよそ『呪力』と呼べるものがないってことですよね？呪術師どころか、補助監督：：でしたっけ。それさえ私には到底務まりませんよ」

一般人に見られないために『帳』とやらを張るにも『呪力』がいる。

一応、呪術師の送迎なども補助監督の仕事に含まれるらしい。

それでも呪術師にわざわざ呪力を割いてもらってまで帳を張るよりも補助監督が帳を張り、後は呪術師に全て任せる方が理にかなっているだろう。

呪術師を送迎し、事務仕事をするだけの補助監督なんて、前線で命を張って戦っている呪術師達に反感を買いそうだ。

「いや、補助監督ではなく、呪術師として君には活動してもらいたい」

「えっ」

「確かに君には『呪力』がない。だが補助監督とは別の形で前線でサポートができるはずだと、俺は思っている」

「それって……」

「君にはあるんだろう。それを可能にするだけの能力が」

——なるほど。そうか、盲点だった。

あの能力が呪霊にも効くのであれば、祓うことは出来なくとも大幅に弱体化させることは可能かもしれない。

私の持つ本来の^{権能}力。

あらゆるものを墮落^{ランクダウン}させる能力——

『^{デカダンス}墮落世界』。

人間だろうが、そうじゃなからうが——例え神であろうと問答無用で弱体化させ、無力化する力。

この能力が呪霊にも通用するのなら……特級呪霊と呼ばれる最高ランクの呪霊でさえも四級以下の低級呪霊に格下げ出来る、かもしれない。

まあ……まだ試したことないから可能かどうか分からないけれど。

「もし本当に、君の能力があらゆるものを弱体化させると言うのなら、その力は呪術界にとつての切り札になり得るだろう。その分上層部に目をつけられたら何をされるか分

からないが……」

上層部、ね。

あの世界でも『上層部』という言葉には良い印象を抱いたことは無い。むしろ聞くだけで不穏な予感すらさせる言葉だ。

学園都市でもろくでもない奴（主に星野郎）が多かったが……夜蛾さんの顔を見る限り、呪術界とやらの上層部もきつとそう言う人間が多いんだろう。

「……に入学するなら、術式を偽って一応四級術師として話を通しておく……とは言え隠し通すのにも限度があるがな。基本的に上層部は自分の保身しか頭にない。バレたら最悪死刑……ということも普通に有り得る」

「ええ……」

そこまで腐ってるのか。

もしかしたら学園都市上層部よりも……いや、比べるのは野暮ってやつだろう。

「リスクはあるが、一応の衣食住は提供するし、卒業後も寮を拠点にして元の世界に帰るための方法を探すのも構わない。もちろん、呪術師のサポートも引き続きしてもらおうが

——どうする」

それを聞いて、私はふつと笑った。

異世界だと知って動揺したりもしたけれど。

覚悟はとうの昔に出来ていたし、答えは既に決まっている。
私の答えは——